

## 11 小菅家と梨の栽培

泉区では、果樹生産農家が増えている。手掛けられている果樹の種類を多い順に記すと、梨、柿、梅、ぶどう、さくらんぼ、りんご、桃などである。

中でも梨は、近年になって作付け面積が増え、近隣の地区とも合わせて、横浜の梨という意味の「浜なし」という名で親しまれるようになってきた。が、ここにいたるまでには長い道のりがあり、その先駆的な役割を果たしたのが下飯田町の小菅家であった。

昭和十六年、小菅家では、桃と梨の苗木を、試作品として植えたが、やがて戦時下となり、わずかの樹木を残すのが精一杯であったという。戦争の始まりとともに、食料増産の国策によって、養蚕のための桑畑でさえ、さつまいも、陸稲、麦等の主要食料の畑に変わっていった。したがって、当時は食料とは認められない果樹を育てることは、大変困難であった。

戦後、当時は二宮町にあった「農事試験場」（現在は平塚）の指導のもと、「長十郎」という梨の育成に力が注がれ、数軒の農家が参画したが、病害虫とそれに対応する農薬が無いことにより、挫折の繰り返しであった。

一方、桃の品種「白鳳」は気候風土に適していたこ

ともあり、順調に生産が伸びた。昭

和二十年代半ばに

は、中和田地区で

百軒余りの農家が

「白鳳」の生産を

始め、相模川以東

の地域に「湘南果

樹組合連合会」が

結成された。とこ

ろがまもなく生産

過剰となり、せん

こう病という病気にも悩まされ、生産を断念する農家が増

え、三十年代に入って壊滅状態となった。

この間、小菅光重は農産物による有利な現金収入の道を

模索して様々な野菜にも挑戦し、セロリ、アスパラガス、

アーティチョーク、リーキ、コーラビといった西洋種の野

菜の栽培を試みている。光重は大正十二年頃、簡易フレイ

ムによる冬季のきゅうりづくりやトマトの栽培も手掛けた



昭和25年頃の野菜づくり



梨の花粉づけをする小菅氏

先駆的な人であった。やがて、高品質の肥料が開発され、奨励政策による肥料の配給も多くなり、各所で野菜づくりが活発化した。光重の子息伊賀氏も、結球白菜の「練床苗ねりどこなえ」の技術などを各所に指導した。各農協にも「野菜部」が発足し、きゅうり（相模半白）、ほうれん草、キャベツなど、現在につながる野菜が作られ、急速に野菜産地として発展した。

ところが、小菅家ではこの肥料による土地の荒廃が一因となり、かえって梨の生産に心血を注ぐことになったということである。とはいっても、「長十郎」をはじめこの地に合う「菊水」「旭」などの品種は市場で伸びなやみ、長い間、品種の改良が待たれていた。

昭和四十年代に入り、三水と呼ばれる「新水」「幸水」「豊水」などの新種が次々と導入されるようになり、需要も増え、にわかには梨の生産の気運が高まった。その後、この地に養護施設を作る要請があったのを機に、小菅家では、野菜などの畑地を梨畑に切り替えた。もとの梨畑はその歴史を語るかのように、昭和五十五年十一月、「なしの木学園」となっている。

現在では梨の生産農家も増え、「浜なし」として定着してきた。この「浜なし」は、多年の教訓が生かされたため、の直売方式に特徴があり、近隣の人口増加に伴う消費者の増加と品質の良さに裏付けられて、泉区とその周辺の代表的な産物となった。

浜なしの作付面積

